《論文》

主体的・対話的で深く学ぶ図画工作科授業の構想

関山　均

／論文

主体的・対話的で深く学ぶ図画工作科授業の構想

関山　均

和文抄録：平成29年３月31日に新しい学習指導要領が公示され、小学校図画工作科の授業においても質的改善が求められている。本稿では、小学校教員の免許を修得する学生への指導を目的として、今回の改訂の趣旨を踏まえ、これまで小学校教員としての36年間に実践研究してきた図画工作科の授業を生かしながら、新しい学習指導要領に則した授業を構想することとした。

キーワード：資質・能力、深い学び

Ⅰ　研究の背景

1　学習指導要領の改訂

今回の改訂においては、「社会に開かれた教育課程」の実現を目指して、未来を創り出していくために必要な資質・能力を育む学校教育の実現が急務となっている。即ち、今日の情報化やグローバル化など急激な社会的変化においても、未来を創り出していく「生きる力」を備えた子供たちの育成が求められている。

今回、「生きる力」を育むために、幼・保・小・中・高校まで教科等を超えて共通する三つの資質・能力が次のように整理された。

①「何を理解しているか、何ができるか」（生きて働く「知識・技能」の習得）
②「理解していること・できることをどう使うか」（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）
③「どのように社会･世界と関わり、よりよい人生を送るか」（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等の涵養」）

更に、三つの資質を身に付け、生涯にわたってアクティブに学び続ける質の高い学びの実現を目指し、次の視点から授業改善を求められている。

①学ぶ意味と自分の人生や社会の在り方を主体的に結びつけていく「主体的な学び」
②多様な人との対話や先人の考えで考えを広げる「対話的学び」
③各教科で習得した知識や考え方を活用した「見方・考え方」を働かせて、学習対象と深く関わり、問題を発見・解決したり、自己の考えを形成したり、思いを基に構想・創造したりする「深い学び」

2　図画工作科における現状

これまでも「生きる力」を育てるために、「意欲・関心・態度」、「思考力・判断力・表現力」、「技能」、「知識・理解」の資質・能力を身に付ける授業づくりが行われてきている。これまでの改訂や研究において痛感されることは、時代の要請による重点が図られることはあったとしても、育てたい資質・能力はほぼいつの時代も大きく変わることはなく、本来変わるものでもないと考える。今回の改訂の視点を踏まえながら、これからどのような子供の育成を目指し、これまでの授業のどこをどのように質的に改善すべきか、時代の要請やこれまでの成果や課題を踏まえて、より充実させるよう見直しを行う必要がある。

筑波附属小学校の笠雷太は、「『資質･能力』を育成する図工科授業モデル」の中で、「全国的に現行の学習指導要領の理念、『子供一人一人が個別に持っている感性を働かせ、つくりだす喜びを味わう』という授業観は広がりを見せているように思える。しかしながら、課題があることも事実である。コンピテンシー（資質･能力）とコンテンツ（内容）の関係や結びつきが十分ではないのである。次期学習指導要領へ向けた『コンピテンシー・ベイス』への転換は、まさにこれまでの『充実したコンテンツ』を持つ図画工作科の学びを『より確かな学力観』として『コンピテンシー』」の視点で見直し価値付けることであり、教科の意義を確かなものにする機会なのである。」と述べている。

昭和59年４月から平成８年３月までの12年間、鹿児島大学教育学部附属小学校において図画工作科の実践研究を行い、資質・能力の観点から題材の内容の分析をした授業を行ってきており、子供たちにどんな力が身に付いてきているか、十分とは言えないまでも授業を検証してきた。全教科を担当する小学校教諭にとって図画工作の授業においては、ややもすると目標、資質・能力よりも題材の内容等に目が向きがちとなり、子供たちが楽しく表現していることで良しとしてしまいがちであり、また、一人一人の子供の表現に十分に対応できているか疑問が残るところである。事実、本学の学生に「表現することは好きか」の問いに、「思い通りに表現できず苦手」と応える学生が多い。このように子供に「どんな力がどの程度身けばよいか」、「どんな力がどの程度身に付いたか」を捉えるのは難しく、ましてや限られた期間やいくつかの題材を通して捉えるのはなおさらのことである。

Ⅱ　研究の方向

上記のような背景を踏まえ、本研究では、過去の実践研究をふり返りながら、改訂の視点から現行の授業の見直しや改善を行い、「主体的･対話的で深く学ぶ図画工作科授業」の構想を行いたい。具体的には、「主体的･対話的で深く学ぶ」の視点から、望ましい子供の姿や授業の基本的な考え方を明らかにし、授業創造に当たって、資質・能力の明確化、望ましい題材の選択・開発、学習目標、学習内容、学習過程、学習活動、教師の具体的な働きかけ、学習評価の捉え方を明らかにしていく。

Ⅲ　主体的・対話的で深く学ぶ図画工作科授業の構想

1　「主体的・対話的で深く学ぶ」とは

平成28年12月に示された「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」に、「主体的・対話的で深い学び」について「学びの過程において子供たちが、主体的に学ぶことの意味と自分の人生や社会の在り方を結び付けたり、多様な人との対話を通じて考えを広げたりし（中略）、単に知識を記憶する学びにとどまらず、身に付けた資質･能力が様々な課題の対応に生かせることを実感できるような学び。」とある。そして、「深い学び」の実現に向けては、図画工作科の特質に応じた「造形的な見方･考え方」、即ち「感性や想像力を働かせ、対象や事象を、形や色などの造形的な視点で捉え、自分のイメージを持ちながら意味や価値をつくりだすこと」を働かせることが必要であると述べている。

つまり、最終的に「子供自身が自分の人生や生活の中で、表現や鑑賞を通して、表現する意味や価値、自分

の資質・能力の高まりを実感し、喜びや自信を持って豊かな生活を創造しようとすること」であろうと考える。

「主体的学び」について、寺本貴啓の「小学校アクティブ・ラーニングの授業のすべて」には、「自分自身で判断し行動できる」ことが求められ、「問題意識」、「知識・技能」、「とらえ方・考え方」、「メタ認知」の四つの要素がバランスよく必要であると述べられている。改訂では、「主体的学び」を「学ぶ意味と自分の人生や社会の在り方を結び付ける」ことと述べており、子供自身が学ぶ意味や価値を実感するためには「メタ認知」の要素が重要になってくると考える。筆者は以前、附属小の研究において、「自己の表現をふり返る力（自己認知・自己統制力）」を高める「ふり返る活動」を学びの過程に位置付けて実践してきている。そこで、捉え方や活動内容の見直し・整理を行い、学びの過程の中に位置付けたい。

「対話的学び」について、寺本は同書の中で「対話を通して新たな知識や考え方を共有・創造する」ことが求められ、「問題意識」、「合意形成能力」、「批判的思考」の三つの要素がバランスよく必要であると述べている。

筆者は以前、附属小の研究において、「子供自ら学びとる授業」を創造していくために、子供一人一人が自分の発想や造形的な見方・感じ方で追究していく「個の追究活動」と、自分の造形的な見方・感じ方を基に、友達相互で「磨き合い高め合う活動」を学びの過程に位置付け実践してきている。先ほどと同様に、捉え方や活動内容の見直し・整理を行い、学びの過程の中に位置付けたい。

「深い学び」で重要なことは、「造形的な見方・考え方」を支える「形や色などの造形的な視点」つまり「造形要素」の理解とそれらを形にする技能であると考える。「立体的な見方・考え方」を支える造形要素である「量感、均衡、動勢など」の理解と技能により、より立体的な表現ができるのである。指導者は指導する際に、子供に身に付けさせたい「形や色などの造形的な視点」をしっかりと捉えておくことで、より質の高い資質・能力を子供に身に付けさせることができると考える。

以上のことを踏まえ、「主体的・対話的で深く学ぶ」とは、「対象や事象を形や色などの造形的な視点で捉え、既習の造形的な見方・考え方を基に創造的に発想・構想し、自分の思い（主題）を持ち、自分なりの表現方法で、手などを十分に働かせ創意工夫して表現したり、友達と話し合ったりする中で、自分の表現を確かめながら、つくりだす喜びを味わい自己の表現を追究するとともに、生活や社会の中の形や色などと豊かに関わり、楽しく豊かな生活を創造し続けようとする学び」と捉え、授業における具体化を図っていく。

2 「主体的・対話的で深く学ぶ子供」とは

図画工作科の授業を通して育成されるべき「主体的・対話的で深く学ぶ子供」の姿を、学習の流れに沿って次のように捉えた。

- 対象や事象への感動を形や色などの造形的な視点で捉え、表現や鑑賞への思いやイメージ、意欲をもつ。
- 既習の造形的な見方・考え方を基に、創造的に発想・構想し、自分の思い（主題）を明確にする。
- 自分の思いやイメージを基に、造形的な見方・考え方を働かせ、つくりだす喜びを味わいながら主体的に表現したり鑑賞したりする。
- 材料や用具の特徴を生かし、手などを十分働かせ、表し方を創意工夫して創造的に表現する。
- 友達と話し合うなどする中で、自分の表現を確かめながら、より主題に合った作品を楽しく追究する。
- 自分たちの作品や美術作品などを鑑賞し、表現の意図や特徴、表し方の変化などを感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を深める。
- 生活や社会の中の形や色などと豊かに関わり、楽しく豊かな生活を創造し続けようとする。

そして、「主体的・対話的で深く学ぶ子供」は、次の三つの資質を有し、また、それらを向上・発展的に求め高めていく子供であると考える。

①「造形的な知識・技能」

自分の表したいものを表現していくための造形活動や鑑賞活動に必要な造形的な秩序や美しさに関する知識や感覚、創造的な技能とそれにともなう知識である。自分の感覚や行為を通して理解した「知識」であり、造形的な視点である「形や色など」、「形や色などの感じ」、「形や色などの造形的な特徴」などが活用できる「知識」でもある。

②「造形的な思考力・判断力・表現力等」

対象や事象、材料、場所との出会いから生じる課題を、既有の造形的な知識・技能などを駆使して、自らの力で創造的に解決していくための発想力、想像力、構想力、表現力、作品などのよさや美しさなどを感じ取り味わう鑑賞力などの造形に必要な能力である。

③「学びに向かう力、人間性等」

形や色などに対する好奇心、材料や用具に対する関心、つくり出す活動に向かう意欲（喜びや楽しさ）、楽しく豊かな生活を創造しようとする態度、モノ・コト・他者などと対話する力、自己の表現を振り返る力、豊かな情操（よりよいものやより美しいものを目指す人間性）などである。

三つの資質・能力である「造形的な知識・技能」、「造形的な思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」は、図１のように相互に関連し合い、一体となって働く性質がある。それぞれの資質・能力は、子供が自己と向き合いながら、他者や社会・自然などとの多様な関係の中で活動することによって育成されると考えられる。

目標の実現に当たっては、「主体的・対話的で深い学び」の過程において、それぞれを相互に関連させながら資質・能力の育成を図り質の高い学びの実現を図ることで、三つの資質・能力が確かに身に付くとともに高まるものと考えられる。

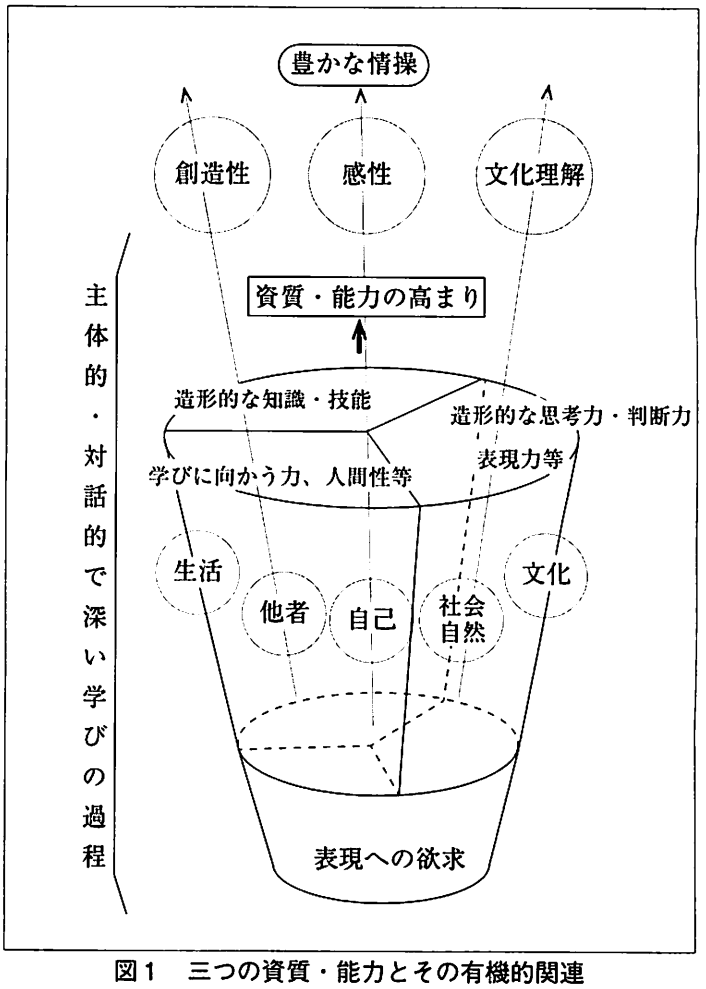


図１　三つの資質・能力とその有機的関連

なお、三つの資質・能力は、将来にわたり教科を超えて活用できる「汎用的な資質・能力」まで視野に入れられることが求められている。

３　「主体的・対話的で深く学ぶ図画工作科授業」の構想

主体的・対話的で深く学ぶ子供を、先に述べた三つの資質を踏まえ、授業を通して育てていく。そして、三つの資質に関わるそれぞれの学習内容、学習活動が、有機的に関連し合って認識され、表現に生かされていく力となる授業を創造していくことになる。

（1）授業の基本的な考え方

「主体的・対話的で深く学ぶ子供の育成」を図る授業を創造していくに当たっては、次のようなことを大事にしていきたいと考える。

・表現や鑑賞へ興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の表現・鑑賞活動をふり返って子供自身が学ぶ意味や価値を実感できる。
・思いや考えを基に創造的に表現したり鑑賞したりする過程の中で、造形的な見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、考えたりできる。
・友達と話し合うなどする中で、自分の表現を確かめ、より主題に合った作品を追究することを通して、自己の造形的な見方・考え方を広げ深めることができる。
・子供自ら主体的な活動を展開する中で生じる失敗やつまずきを考慮し、最後まで自分の力でやり遂げるための時間的なゆとりを持たせる。
・自己の表現を自らつくり出していく過程において、あくまでも子供自らの反省や、反省に基づく子供自らの努力や創意工夫によって表現していくことができる。
・たとえ回り道のようであっても、子供自身が自ら表現していこうとする意欲と表現し続けようとする意志を持つという考え方を大事にする。

（2）授業創造に当たって

「主体的・対話的で深く学ぶ授業」を構成するに当たっては、上述した授業創造の基本的な考え方を踏まえ、次の手順で進める。

①子供理解

子供を理解するに当たって、三つの資質や個人差の諸側面から、次のような観点を踏まえていくことが大切である。

・造形的な知識・技能の達成度
・造形的な発想力・構想力・想像力・表現力・鑑賞力などの能力
・主体的な学習の能力
・対話的な学習の能力
・自己評価の能力（自己認知力、自己統制力）
・友達とのかかわり具合（合意的形成能力、批判的思考の能力）
・グループでの協力度
・自ら表現する意欲・態度
・教材への興味・関心
・生活経験、学習経験
・学習のテンポ・リズム

②各学年の目標及び内容の明確化

「主体的･対話的で深く学ぶ子供」を育成するためには、「小学校学習指導要領解説　図画工作編」（平成29年6月　文部科学省）に示してある図画工作科の目標、各学年の目標及び内容を確かに身に付けさせることが大切である。今回の改訂で、図画工作科及び各学年の目標は三つの資質･能力の観点で、各学年の内容（A表現、B鑑賞、共通事項）においても三つの資質・能力の観点から述べられており、授業を行うに当たっては、これらの目標及び内容の系統や内容の特性を踏まえることとなる。目標及び内容が、常に三つの資質・能力の観点から捉えられ、指導者は三つの資質・能力を意識して授業を行えるようなっている。

③望ましい題材の選択・開発

育てたい三つの資質･能力の観点から、各学年の子供の発達段階や子供の実態、各内容領域の特性を踏まえ、

望ましい題材の選択や開発を行い、題材内容の精選と学習内容の重点化を行う。なお、これまでの題材を三つの資質・能力の育成という観点から見直すことも大事である。基本的には次の条件を備えておくことが必要であると考える。

・つくりだす喜びを味わうことができる。
・自分にとっての意味や価値をつくりだすことができる。
・形や色などと豊かに関われる。
・工夫したり、発見したり、多様な発想をしたりできる。
・手などを十分働かせて表現できる。
・生活や社会と結び付いている。

④学習目標の明確化

学年別に具体化された三つの資質・能力と次のことを踏まえ、学習目標を設定する。

・発達段階や子供の実態、個人差、題材の特性を踏まえ、三つの資質・能力の観点から設定する。
・子供たち一人一人の課題を内包できるように共通課題を設定する。
・ねらいがはっきりし、自己評価でき、次への意欲を促せる目標である。

⑤学習内容の構造化

学年別に具体化された三つの資質・能力、重点化された学習内容、子供の実態と次のことを踏まえ、学習内容を構造化する。学習内容を三つの資質・能力の観点からしっかりと価値付けることが大切である。

・多様な発想が生まれ、表現に広がりが表れ、その過程で自らの力で工夫したり発見したりしてつくりだす喜びを十分に味わえる内容である。
・材料・用具の選択の幅が広がり、手などを十分に働かせてじっくりと取り組める内容である。
・表現と鑑賞が一体化した内容である。
・生活を美しく豊かにする造形や美術の働き、美術文化についての理解を深める内容である。
・三つの資質・能力を効果的に高めることができる内容である。
・子供たちの表現欲求や興味・関心、発達段階に合ったものであるか（適時性）、子供たちの認識の深まりや技能の高まりの過程に合っているか（順序性、転移・発展性）、どの子供にも理解、習得可能な共通性のものであるか（共通性）、子供たち一人一人の個人差にも対応できるか（多様性・発展性）などを吟味・考慮する。

⑥学びの過程（学習過程・学習活動・教師の具体的な働きかけ）の具体化

主体的・対話的で深く学ぶ過程となるようこれまでの考え方を踏まえ、次のような観点から具体化を図る。

・「主体的・対話的で深く学ぶ」の視点から学びの質の向上が図れる。
・資質・能力を相互に関連させながら育むことができる。
・子供一人一人の驚きや発見の喜び、学び取る喜び、つくりだしていく喜びを味わいながら活動できる。
・自分の思いを自分なりの方法で、手などを十分働かせて表現していく過程を大事にし、じっくりと追究できる。
・個の追究活動、磨き合い高め合う活動、ふり返る活動をより一層重視する。
・子供一人一人の表現のよさやつまずきを常に把握することに努め、適切な指導・助言・賞賛を与える。子供とともに考えたり表現したりする。

○基本的な学びの過程

過程とその基本的な考え方		活動の流れと主な活動の基本的な考え方	
発　想	事象や対象などに五感を通して働きかけ、感動を基に形や色などの造形的な視点で捉え、造形の面白さや可能性を発見し、表現や鑑賞への思いやイメージ、意欲を持ち、方向を見い出す過程	事象・対象 感　動 表現意欲 （課題発見）	個の追究活動 自分の造形的な見方・考え方を基に、主体的に活動していく中で、表現・鑑賞活動に必要な知識・技能、手順・方法を自ら学びとったり、それを駆使して表現したりする活動
構　想	自分の思いを大事にしながら様々な試みをする中で、既習の造形的な見方･考え方を基に、創造的に発想･構想して、自分の思い（主題）を明確にし、表現への意欲を高め、自分の思いに合った表現方法・手順、材料・用具の選択の見通しを持つ過程	自分の思い （課題追究） ・試みる活動 ・個の追究活動 ・磨き合い高め合う活動 ・ふり返る活動 （課題把握） 表現の見通し	試みる活動 構想段階で、表したいものを自由にスケッチしたり、材料・用具に触れたりする中で、イメージの拡大や材料体験、感覚訓練、表現意欲の拡大などを図る活動 表現段階で、自分の課題を解決するために必要に応じて表現の試みをする活動
表　現	自分の思いを基に､造形的な見方･考え方を働かせ、つくり出す喜びを味わいながら表現したり、鑑賞したりする。 また、友達と話し合ったり、自分の表現を確かめたりする中で、造形的な見方・考え方を広げ深め、より主題に合った表現を追究する過程	表　現 （連続・発展的な課題追究） ・試みる活動 ・個の追究活動 ・磨き合い高め合う活動 ・ふり返る活動	磨き合い高め合う活動 既習の造形的な見方・考え方を基に、自分の思いを基に自分なりのよさを認める友達との話し合いで造形的な見方・考え方を高め、話し合いの結果を基に見直し・修正をし、表現をより確かなものにしていく活動 ふり返る活動 立ち止まって、自分の表現の形や色などの特徴を確かめ価値付けたり、その後の方向を考えたりする活動 学習をふり返ることで、自分の能力の定着や自己変容の自覚を図ったり、表現の喜びを十分に味わい、次の課題解決への意欲を高めたりする活動
鑑　賞	これまでの追究過程をふり返ったり、作品を鑑賞したり、使って遊んだりする中で、自分の思いを表現できた喜び十分味わい、学んだ意味や価値を実感し、次時の学習への思いをふくらます過程	鑑　賞 表現への充足感 学ぶ意味・価値の実感 （新しい課題の発見）	

⑦学習評価

学習評価については、今回の改訂の三つの柱に基づいて、平成32年度より４観点から３観点になる。学力の３要素や資質・能力の三つの柱を踏まえ、「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的学習に取り組む態度」の３観点で観点別学習状況の評価を行うことになり、具体的にどのように評価していくかについては、これからの検討となっている。

Ⅳ　第６学年題材「私の大切な遠近のある風景」の授業構想（全６時間）

これまで述べてきた考え方に立ち、主体的・対話的で深く学ぶ授業の望ましい姿を、第６学年題材「私の大切な遠近のある風景」で構想する。

１　題材について

本題材には、次のような価値があり、子供の資質・能力を高める学習が展開できるものと考える。

①描く対象が大切な風景ということで生活との関わりが深く、心象面において自分の思いを込めて意欲的に表現できる。

②６年生は遠近を意図的に表現することができるようになり、描く視点を工夫することで、遠近をどう表現するか工夫したり、主題を効果的に表現するために彩色の仕方を工夫したりすることで、造形的な見方・考え方を高めることができる。

③参考作品や友達の作品の鑑賞、自己の表現を追究する「個の追究活動」や友達と話し合う「磨き合い高め合う活動」、自己の表現を確かめる「ふり返り活動」などを通して、主体的･対話的で深い学びの活動が期待できる。そして表現し学んだことが、心の原風景として深く心に残り、これからの人生のバックボーンとなる。

２　目標・内容の構造

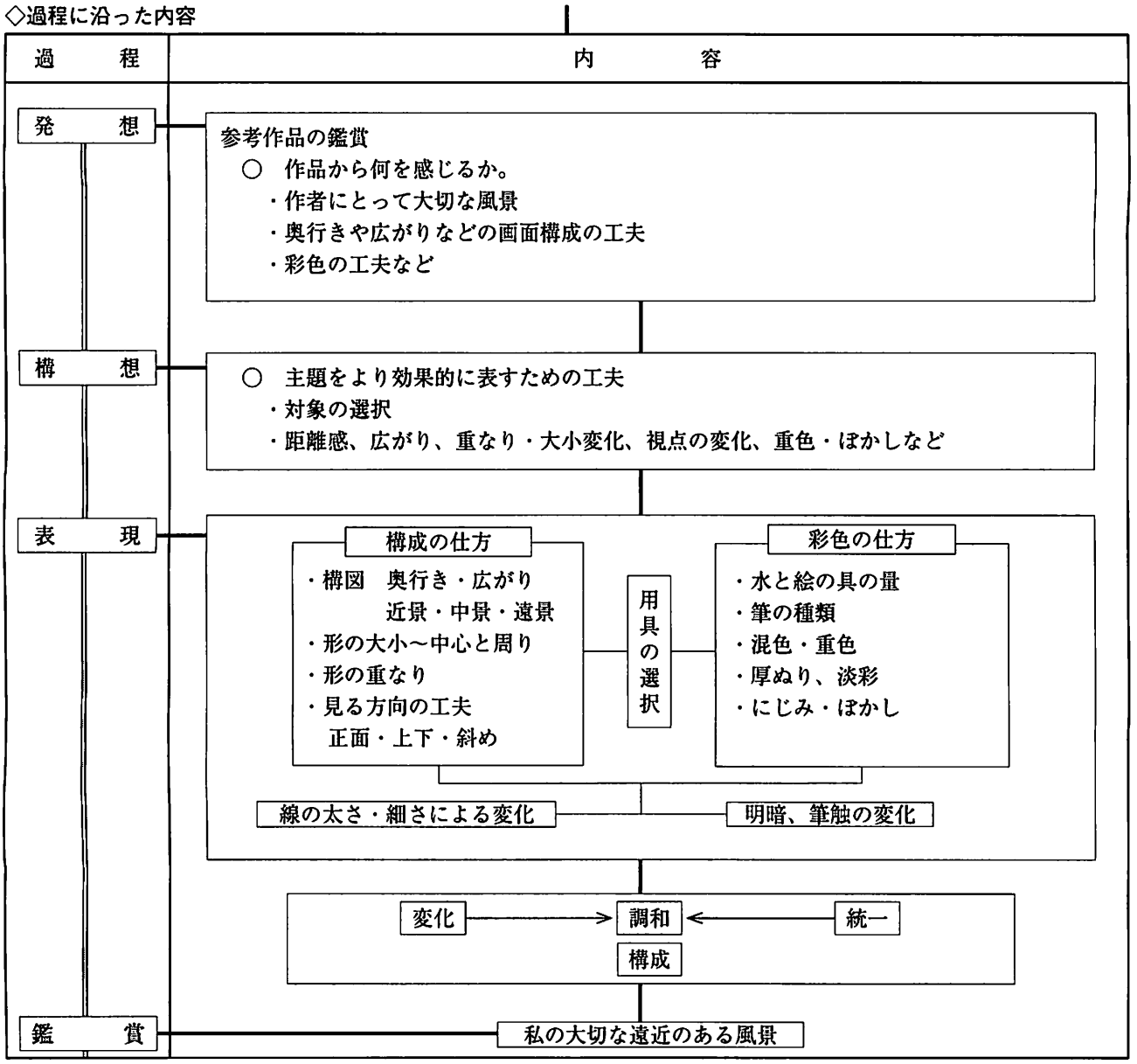
◇学習目標

造形的な知識・技能	造形的な思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力、人間性等
・絵に表現する行為や感覚を通して自分にとって大切な思いや遠近のある風景の画面構成や彩色の仕方を理解できる。 ・線描材や水彩絵の具の使い方や表し方を理解し、表現できる。	・大切な思いや遠近感が表れる風景を見付け、主題を効果的に表わせるように、画面構成や彩色の仕方の構想を練り、工夫して自分らしい表現ができる。	・大切な風景を遠近感が表れるように描く面白さに気付き、描く風景や友達と対話したり、表現を確かめたりしながら主体的に表現・鑑賞できる。 ・心の原風景を認識できる。

◇学習内容

造形的な知識・技能	造形な思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力、人間性等
・対象物の形や色、感じ、特徴の把握 ・対象を捉える視点の工夫 ・遠近表現の工夫 奥行き・広がり、近景・中景・遠景 形の大小（中心と周り）、形の重なり ・線描材の選択、線の太さ・細さによる変化 ・彩色の仕方の工夫 混色・重色、にじみ・ぼかし、厚ぬり・淡彩 明暗や質感、陰影、全体の色調 ・描写の仕方の工夫、精密や大づかみ ・水と絵の具の量による効果 ・筆の選択、筆触の変化	・表したい大切な風景を見付ける。 ・大切な思いや遠近を表現するための画面構成や彩色の仕方を構想したり、表現したりする。 ・自分や友達の作品を鑑賞し、よさや課題を見付ける。 ・主題をより効果的に表現する工夫を考え、自分らしく表現する。	・大切な思いや遠近のある風景を表現することへの意欲 ・主題を形や色に表現していく喜びや主題を表現できた成就感 ・描く風景や友達との対話 ・自分の表現のよさの確認と価値付け・今後の方向 ・自己の表現力の高まりとその実感 ・心の原風景への認識

◇過程に沿った内容



3　学びの過程

過　程	主な学習活動	時間	教師の具体的な働きかけ
発　想 構　想	1　参考作品の持つよさについて感じたことを話し合う。 ・作者の思い ・遠近や彩色の工夫　など 2　学習のめあてや進め方を話し合う。 3　遠近の表し方について考え見通しを持つ。 （1）自分にとっての大切な風景を探す。 （2）簡単な線描をする。	2	・既習の形や色の造形的な視点で、参考作品の作者の思いや画面構成・彩色の仕方などの工夫を話し合わせ、表現への意欲を喚起し表現へのイメージを持たせるようにする。 ・学習のめあてをしっかり把握させ、表現への見通しを持たせる。 ・毎日の生活などで、大切に思う自分だけの風景を、光や音、風など感じながら探させる。 ・自分なりの見方・感じ方で簡単な線描をさせ認識を深めさせる。 ・お互いのよさや改善点について認識させることにより、画面構成の能力を高めるようにする。

	（3）線描した作品について話し合う。 ・全体で作品を鑑賞する。 ・グループでよさや改善点を確認したり修正したりする。		・全体で鑑賞をさせることで、新しい見方・考え方に気付かせる。 ・個々に接し、表現へのイメージを把握するとともに表現への見通しを持たせる。
表　　現	4「私の大切な遠近のある風景」を絵に表す。 （1）表す場面の線描をする。 （2）線描した下絵を見て話し合い、修正をする。 （3）下絵を見て、遠近や思いが表れる彩色の工夫について話し合う。 （4）彩色する。	4	・対象をしっかり見つめ、自分なりの主題をしっかり表現するように促す。 ・お互いの線描した下絵のよさや課題をふり返ったり話し合ったりして、見方・考え方を高め、追究の見通しや自信を持たせるようにする。 ・彩色の工夫について具体的に話し合わせ、新たな課題を持たせるようにする。 全体の色調、色の明暗、色の濃淡など ・教師は、主体的・対話的活動を促しながら、机間指導の中で子供一人一人の表現の仕方を理解し、よさを見出し、助言・援助し、表現に自信を持たせる指導に努める。 つまずきの原因の発見、解決の示唆、変容の確認、明確な観点からの賞賛
鑑　　賞	5　作品を鑑賞し、これまでの学習の成果と課題をふり返る。		・お互いの作品のよさや表現の過程を認め合わせ、自己表現力の高まりや表現できた喜びを十分に味わわせ、次回の表現への意欲を持たせる。

V　まとめ

これまでの実践研究をふり返り、新しい学習指導要領に則した図画工作科の授業の構想を行ったが、これまでも実践研究されてきた内容と重なるところが多かった。即ち、教師はこれからも、これまで研究実践してきたことや子供一人一人の実態を踏まえ、子供自身が自分の人生や生活の中で、表現・鑑賞を通して、表現する意味や価値、自分の資質・能力の高まりを実感し、喜びや自信を持って楽しく豊かな生活を創造できるよう、子供一人一人の表現としっかりと向き合い、日々の授業を積み重ねていくことが大事である。子供一人一人にとって小学校時代の豊かな表現経験は、これからの人生を「心の原風景」として彩り、未来を創り出していく大きな生きる力となっていくと考える。

〔参考文献〕
・教育美術　公益財団法人 教育美術振興会、2017. 7月号No.901、12月号No.906
・学習指導要領 新旧対照表 小学校図画工作科　日本文教出版　2017.7.31
・笠雷太編著 「資質・能力」を育成する図工科授業モデル　学事出版　2017.3.30
・寺本貴啓・後藤顕一・藤江靖彦編筆　六つの要素で読み解く小学校アクティブ・ラーニングの授業のすべて　東洋館出版社　2016.12.17
・鹿児島大学教育学部附属小学校「子供自ら学びとる図画工作科の授業」1986～1989
・鹿児島大学教育学部附属小学校「自己の表現を自らつくり出す図画工作科授業の創造」1990～1994
・鹿児島大学教育学部附属小学校「楽しい想像の世界がひびき合う図画工作科授業の創造」1995

To study deep learnig methods for art classes through active and interactive activities.

Hitoshi SEKIYAMA

The Ministry of Education's new guidelines were made public on March 31st, 2017. Within the new guidelines there is an urge to increase the quality of arts and crafts classes.This report aims to improve the expertise of education students in accordance with the new Ministry of Education guidelines. This report also aims to conceive of new avenues of approach in regards to the teaching of arts and crafts classes by utilizing the thirty-six years worth of research and practical knowledge.

Key Words: Qualities and Abilities, Deep Learning